

国語科学習指導案

日時 令和5年11月22日(金)

13:30~14:20(第5校時)

学級 1年6組

場所 1年6組 教室

授業者 河合 のぞみ

1 単元名

いにしへの心にふれる

『蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から―』

2 教材観

本教材「竹取物語」は、源氏物語の中で「物語の出で来はじめの祖」と記されている。教科書では、かぐや姫の成長と、五人の貴公子の求婚と失敗、さらに帝の求婚、かぐや姫の月への昇天帰還が描かれており、全体を概観できる。「蓬萊の玉の枝」はくらもちの皇子がかぐや姫からの難題をその権力や富の力で、さらには弁舌をふるって解決しようとする話である。一方、かぐや姫が昇天した後の帝は、手紙と不死の薬を燃やさせてしまう。このような登場人物の言動は、書かれた当時の社会と人間の姿が表れている。現代に生きる自分たちと共通する心情や異なる部分に気付かせ、古典教材に親しみ、読み味わってほしい。

3 本校の研究主題との関わり【2-(2)】

本時は、仲間との対話や登場人物(帝)との対話を通して、古典の世界に生きる人々と現在に生きる私たちに共通する心情や相違点を明確にする。帝の行動に対する考えを交流し、帝と自分との比較、仲間との比較をすることで、自分の考えを広げたり深めたりする姿につなげていく。本時のまとめに記述する内容に見通しをもたせ、対話的な活動ができるようにする。

4 本時の目標

帝が手紙と不死の薬を燃やす時の思いを読み取る活動を通して、誰かを愛しく想うことは古典の世界と現代に共通する心情であると気づき、描かれている古典の世界を想像し、親しむことができる。

5 本時の展開(4/5)

過程	学 習 活 動	指導と手立て・評価規準
つかむ	<p>1 前時までの学習内容を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「くらもちの皇子」は、うそをついていた。 ・うそをついても好きな人と結婚したい気持ちは今と同じ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習を振り返り、「竹取物語」の登場人物の関係について確認する。 ・前時までのノートを参考にする。 ・P163~P164を読み、帝の思いを読み取るよう伝える。 ・読み取った内容について、少人数(生活班)で交流し、仲間の意見と比較して自分の意見を伝える姿を価値づける。 ・少人数で交流したあと、全体で交流する。 ・話題を焦点化し、「帝」の思いをさらに深められるようにする。 ・「その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言い伝えたる。」の一文に着目させ、燃やしたことの理由や「帝」の思いを焦点化する。 ・少人数(生活班)で交流して考えを確かなものにしたあと、全体で交流する。 ・黒板のキーワードをもとにまとめが記述できるようにする。
考える	<p>課題</p> <p>「帝」はどのような思いで「御文」と「不死の薬」を燃やしたのだろうか。</p> <p>2 P163、P164を読んで帝の思いを想像し、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一番「天に近い山」なので、かぐや姫に自分の気持ちを伝えたいのだと思う。 ・ずっと生きていても、「かぐや姫がいないのは意味がない」と考えているので、不死の命よりもかぐや姫を大切に思っていたのだと思う。 ・「御文」をずっと持っている、未練が残るので、燃やしたのだと思う。 ・もし自分以外の人がこの薬を飲んでしまったら大変なことになると思ったからだと思う。 	
深める	<p>3 話題を焦点化し、課題解決に迫る。</p> <p>未練が残らないようにするためなら、捨ててもよいのに、「燃やした」のはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・燃やすことで、高い山からかぐや姫に思いが届くと思っていたから。 ・「いまだ」という言葉があって、煙がずっと残っているほうが、「捨てる」よりも長い間かぐや姫を想う気持ちが続いているように感じるから。 	
まとめる	<p>4 本時の振り返りをする。</p> <p>①課題に対するまとめと②古典の世界と現代の世界とを比較して気付いたことを記述する。</p> <p>まとめ</p> <p>①帝は、ずっと生きていてもしょうがないと思って不死の薬を燃やした。それくらいかぐや姫のことを大切に思っていたのだと思うし、かぐや姫への思いが届くように燃やしたのだと思う。②誰かに思いを伝えたいと思う気持ちや、その人がいないなら意味がないと感じるのは、今の自分たちと似ていると思った。</p>	
		<p>【評価規準】(思考・判断・表現)</p> <p>帝とかぐや姫の関係や思いに着目して読み、現代の自分たちと比較して、古典の世界と現代の人々に共通する部分を考えている。(C 読むこと(1)イ)</p>